来(きた)るべき方は、あなたでしょうか

マタイによる福音書　１１：２－１１

司祭　ヨハネ 井田　泉

降臨節第 3 主日

2025 年 12 月 14 日

聖光教会にて

「来(きた)るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」マタイ 11:3

これは洗礼者ヨハネのイエスに対する質問です。ヨハネはイエスに洗礼を授けた人です。しかもそのイエスを世に来るべき救い主として指し示してきた人です。そのヨハネは、今は秩序を破壊する危険分子として捕らえられて、獄につながれています。

投獄されているということ自体が苦しく辛いことなのですが、それ以上にヨハネを苦しめていることがありました。迷っていることがありました。それは、自分が指し示してきた、人々にそのように伝えてきたそのイエスが、ほんとうに聖書が約束している「来るべき方」なのか、神から遣わされた救い主なのか、という疑問でした。

これはわたしたちが想像する以上に、ヨハネにとっては苦しいことであったに違いありません。自分の生涯をかけて語り、伝えてきたことがもし間違っていたとしたら、自分の人生は何だったのか。

わたし自分に当てはめて考えてみました。わたしは 46 年間、司祭として働いてきました。牧師として働き、幼稚園の責任も持ち、ある時期は大学、ある時期は神学校の教師でした。いろんなことに関わり、さまざまなことをしたにせよ、自分がして

きたこと、語ってきたことは、ただ一つの目的がありました。それは、イエス・キリストがわたしたちの救い主、世界の救い主であることを伝える、ということでした。

それがもし、イエスが救い主ではなかったとすれば、イエス・キリストが人を、世界を救う力を持たないのだとすれば、わたしの人生は何だったのでしょう。あまりに空しいことではありませんか。

ヨハネの迷い、苦しみには理由がありました。それは、自分が思っていた「来るべき方」のイメージと、現実のイエスとはかなり大きく違っている、ということです。はっきり言えば、神から遣わされる「来るべき方」とは、もっと厳しく罪を責め、悪しき者を容赦なく滅ぼすはずだったのです。ところがイエスはどうもそうではない。たしかにイエスは、地上の権威を恐れず、有力者や指導者を厳しく批判して、権威筋からは憎まれ、迫害されている。けれどもヨハネは思うのです。イエスは優しすぎる。もっと厳しく激しく、神に逆らう者たちを責めて、滅ぼすべきではないのか。

ヨハネは迷いました。「来るべき方」についての自分の考えが間違っていたのか、それとも「来るべき方」がイエスであると思ったのが間違いだったのか。他の人の意見を聞いても仕方がありません。ヨハネは獄中で迷い苦しんで、とうとうイエスに

直接この疑問をぶつけることにしました。そこで自分の弟子たちを送って、直接イエスに尋ねたのです。

「来(きた)るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」マタイ 11:3

それに対するイエスの答はこうでした。

「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」11:4-5

イエスをとおして現に起こっている事実によって判断しなさい、というのです。イエスがここで言われたことは、今日の旧約聖書日課、イザヤ書の言葉です。イザヤの預言がイエスにおいて実現している、ということです。何と言われていたでしょうか。

「『神は来て、あなたたちを救われる。』
そのとき、見えない人の目が開き
聞こえない人の耳が開く。
そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。
口の利けなかった人が喜び歌う。
荒れ野に水が湧きいで
荒れ地に川が流れる。」イザヤ書 35:5-6

神はこのイエスにおいて来ておられる。「来るべき方」を、わたし以外のどこに求める必要があろうか。

洗礼者ヨハネが期待し、待ち望んだ「来るべき方」とは、一言で言って「審判者」「裁き主」でした。世には悪が満ちている。虚偽が横行している。力を持った人々が立場の弱い人々を虐げてますます富と力を増し加えている。神は審判者を送って、不義なる者たちを裁き粛清して、この世の中を造り変えられるはずだと、ヨハネは信じていたのです。

ヨハネの信じたことは正しい。ヨハネの第一の手紙第3章8節にはこう書いてあります。

「悪魔の働きを滅ぼすためにこそ、神の子が現れたのです。」

そしてわたしたちはニケヤ信経でこう告白します。

「（主イエス・キリストは）生きている人と死んだ人とを審くため、栄光のうちに再び来られます。」

これは割引できない真実です。わたしたちは裁き主の前に立たなくてはならない（コリントⅡ 5:10)。厳粛なことです。

ただヨハネの考えには「ずれ」があった。

洗礼者ヨハネの中にも、そしてイエスの中にも、神の怒りが燃えていました。そのゆえにイエスは、神殿で悪どい商売をする者の台をひっくり返すような乱暴な振る舞いをなさいました（ヨハネ 2:13-16)。けれどもイエスのうちに燃える怒りは、実

は神の愛の燃焼だったのです。審判の神は世を愛しておられる神。滅ぼすことが目的ではなく、裁くことを通してわたしたちを清め救うことが神の目的です。わたしたちを裁く方は、わたしたちを限りなく愛していてくださる方なのです。ヨハネの「ずれ」は、このことを十分に知らなかったことでした。

わたしたちが持っている神様のイメージ、信仰についての考え方は、ずれている面、不十分なところがあるかもしれません。自分のイメージを固守するのではなく、イエスの言葉と業によって、それが変えられていく。これが信仰の成長です。洗礼者ヨハネも、自分の「来るべき方」のイメージの正しいところは保ちつつ、ずれたところはイエスによって変えられる必要があるのです。

イエスはヨハネへの返事の最後にこう言われました。

「わたしにつまずかない人は幸いである。」11:6

ここにイエスのヨハネに対する愛があります。

「つまずく」というのは、信じられないで捨ててしまう、離れてしまう、ということです。つまずかず、迷わず、わたしを信じなさい。あなたがわたしのことをずっと、神の小羊、救い主として人々に示してきてくれたことは正しい。あなたの労苦をわたしは知っている。その労苦は尊い。

「わたしにつまずかない人は幸いである。」

わたしを信じることの幸いの中に、あなたは今後もいつづけなさい。わたしはあなたのことをこの上なく大切に思っているのだから。

イエスはわたしたちにも語りかけておられます。

「わたしにつまずかない人は幸いである。」

こう呼びかけつつ招きつつ、イエスはわたしたちの信仰のために祈っていてくださいます。

自分の考えや信仰のあり方が正され変えられて、いっそう深くイエスを知り、信じる者とされる。これこそ、ほんとうの幸い、ほんとうの祝福です。

祈りましょう。

主イエス様、わたしたちを、あなたを信じることのつまずきからお守りください。たとえ、どのような迷いや困難を抱えることがあったとしても、それであなたから離れるのではなく、かえって新しく深くあなたを知り、信じるように導いてください。このクリスマスに、新しくあなたをわたしたちのうちにお迎えすることができますように。尊い主のみ名を賛美します。アーメン